

2000年前の笑顔―明地遺跡の分銅形土製品

やまはく×埋文センター

「ほっとやまはく」

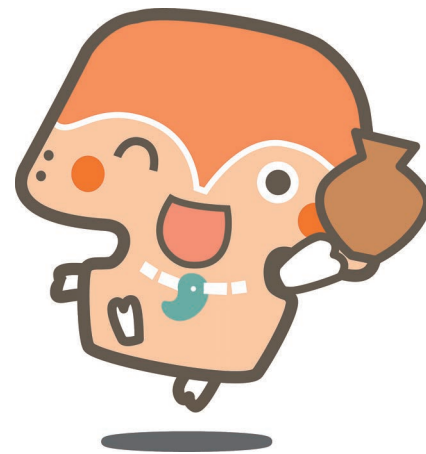
タイム③7



が、その中でも秀逸な作品だと言っているでしょ。そして、この「ほっちゃん」のモデルとなったのが、田布施町大波野の明地（みよつじ）遺跡出土の分銅形土製品です。明地遺跡は県東部を代表する弥生―古墳時代の集落遺跡で、2年で約1万2000平方メートルの範囲を発掘調査し、竪穴式住居84軒や弥生時代墓地などが発見されました。1993（平成5）年、私は他の2人と共に明地遺跡の発掘調査を担当していました。夏のある日、休暇をとっていた私に、

「現場主任のDさんから「お人形さんが出てきました」との電話がかかってきました。てっきり江戸時代の土人形だと思っていた私は、翌日現場に行くと驚きました。それは、通常の倍以上の大きさがあり、顔の表現が明瞭で、なおかつ全体が残る弥生時代中期（今から約2000年前）の分銅形土製品だったのです。さらに、祭祀（さいし）行為の後に二つに折られ、顔を伏せて穴の底に納められたことが確認できる、資料価値の高いものでした。」

県埋蔵文化財センターのマスケットキャラクターは「ほっちゃん」です。デザインしたのは元センター職員の方、名付け親は現調査第一課長のTさん。埋蔵文化財関係機関のキャラクターは全国に数多くあります



ほっちゃん



県埋蔵文化財センター

分銅形土製品は中国・四国地方を中心に分布する、弥生時代中期ないし後期の祭祀具で、通常は破片となって出土します。はかりの重り（分銅）に形が似るためこう呼ばれ、上半部に顔を表現するものも多く見られます。明地遺跡の分銅形土製品は長さ約22センチ、幅約17センチ、400点近くが発見されている分銅形土製品の中でも最大のもので、

品を用いた具体的な祭祀の内容は不明ですが、子どもの魔よけなどのため、ひもでつり下げて用いたと考えられています。明地遺跡の分銅形土製品も、その笑顔の背景には「カワイイ」だけでは説明できない、人々の思いや願いが込められているのです。

明地遺跡の分銅形土製品は、貼り付けた粘土ひもで眉と鼻を、弧状の断面を持つ工具による刺突で目と口を表現しています。このため、本例は田布施地域と松山地域の交流を雄弁に物語る資料でもあるのです。

岩崎仁志（県埋蔵文化財センター事業課長）

▽次回は5月10日で



モデルとなった分銅形土製品

山口県立山口博物館
TEL 083-922-0294
月曜休館（祝日の場合は翌日）。
最新情報はホームページで

